宗教・・・仏教

１．仏教とは

インド哲学の中から興り、ゴータマ・ブッダを開祖とするのが佛教です。佛教はインドで発祥し、タイ、スリランカ、中国、チベット、モンゴル、朝鮮、日本などへ伝播しました。キリスト教、イスラーム教と共に世界の三大宗教の一つに挙げられています。信者数は約５億人ですからインドのヒンドゥー教徒の半分に及ばない数ですが、その哲学的思想の奥深さと信徒の広域性から、この位置づけが与えられています。

２．ブッダの出生と出家

ゴータマ･ブッダは前463年頃、現在のネパールの南端部のタラーイ盆地の領主スッドーダナの子息として生を受けました。 時代としては古代ギリシャの民主政治国アテナイのペリクレス(前460～430年)時代に重なります。共和制ローマでは護民官制度ができたが、平民の不満が収まらず不安定な社会情勢にありました。
ゴータマは７歳から書籍を学び、語学、算数、天文、地理等を学び、武術では弓術と相撲を学んだようです。種族の長となるべく約束された栄華を極めた生活を送りましたが、ゴータマは精神的には満たされず、この幸福が決して永続するとは考えませんでした。
10 代後半でヤソーダラーという女性と結婚し、ラーフラという男子が誕生します。その後、ゴータマは親、妻子にも断りなく出家した、と文献は伝えます。バラモン教の法典が規定している四住期は 学生期⇒家庭期⇒林住期⇒遊行期とあり、ゴータマの出家は林住期(人生の理想、問題を極めたい者は出家して林に住み修業する)に入ったことを意味します。当時の風習に従ったと考えてよく、異常行動であった訳ではありません。
ゴータマは臨終に際して、「スバッダ(弟子の名)、私は 29 歳で善を求めて出家した」と告げています。
ゴータマはバールガヴァ仙人の下で修業の初歩を教わり、この時期に父王の派遣した二人の部下に国に戻るよう説得を受けてます。
次いで遠隔地の大都会ラージャガハのアーラーラー仙人とウッガタ仙人に教えを乞います。しかし彼らのヨーガの境地に飽き足らず、古来、宗教家が行ってきた苦行を実践することになります。６年間苦行を行いますが、「それは丁度、空中に結び目を作ろうとするようなものであった。彼はこの苦行は悟りに至る道ではないと考え･･･」(文献ジャーカタ)裕福な家の娘スジャータから乳粥を受けました。
一緒に修行してきた五人の仲間たちは、これを見て、苦行を放棄したゴータマから離れました。

３．ブッダの教え

その後、ゴータマは菩提樹を背にして東に向かい、結跏趺坐します。ここでゴータマはダルマを知り尽くした正覚に達しました。正覚に達したゴータマは以後ブッダ(目覚めた人)と呼ばれます。これは「縁起のダルマ」であり、「我とこれを取り巻く全てのものは神の創造物ではなく、縁によって生成し、縁によって消滅する」という内容で、当時の人々の理解からかけ離れていたため、直ちに受け入れてもらえそうにありません。誰に語ろうか迷ったようですが、結局、先に別れた五人の修行者の前に行きました。

以下は五人の修行者たちに対して、ゴータマ･ブッダがベナレスの鹿野苑(ろくやおん)で行った最初の説法である。「僧たちよ、避けねばならない両極端というものがある。
その一つは快楽に耽る生活である。それは下等で、卑しく、精神に背き、つまらない、空しいものである。
もう一つは苦行によって徒に自身を苦しめる生活である。それは苦しむばかりで、惨めな、つまらない、

空しいものである。
僧たちよ、完成に至り着いた者は、この両極端を遠ざけるように注意し、その中央を進む道を発見したのである。この道は寂静、智慧、悟り、ニルバーナ(涅槃)に至る道である。・・・・・
僧たちよ、苦悩についての聖なる真理とは次の通りである。即ち、生まれること、老いること、病、死は苦悩である。愛する者と別れることは苦悩である。僧たちよ、苦悩の起源は次の通りである。それは快楽への渇望、生存への渇望、刹那への渇望である。また、苦悩の滅却についての真理は次の通りである。欲望を全く滅して、この渇望を消滅させることである。」
また、続いて、「私がやって来たのは智慧に目覚めていない人を叡智によって満たすためである。布施、智慧、徳、これこそ消え失せることのない富である。ささやかな善を行うことは、困難な仕事を成し遂げるよりも価値がある。・・・・・
もしも完成に至った人(如来)が人々に恵みを広く分かち与えなかったら、また、もしも見捨てられているものを慰めなかったなら、何の価値もないのである。・・・・・ 私の教理は慈悲の教えである。・・・・・ 救いへの道は、万人に開かれている。・・・・・
茅葺きの小屋を象が倒してしまうように、あなたがたの情欲をすっかり消滅させなさい。しかし、庵の隠れ家に身を落ち着けることによって、情欲から逃れることができると思い違いをしてはならない。悪に打ち勝つ唯一の方法は健全なる現実である。」
このようにして始まった説法は、44 年の間、遍歴しながら続けられた。仏陀は弟子たちを連れて全国を遍歴し、教えに耳を傾ける全ての人を帰依させた。・・・・・

（「インドの神話」P.M.ウルセン、他／美田稔訳／みすず・ぶっくす p105~106）

彼は二つの極端、欲の快楽に溺れることと、自らを痛めつけ苦しめることの中間である中道を歩むことが出家者の生きる道であると説きます。彼はこの中道について八正道を挙げて説明します。正しい見解、正しい思惟、正しい言葉、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい思い、正しい瞑想です。
八正道を説明するため四つの真理(四諦)を説きます。生老病死の四苦の原因は妄執であり、妄執から離れ去った時に一切の苦しみから開放されます。これら四つの真理の説明を聞いて、五人の修行仲間は「およそ生じる性質のものは全て滅び去る性質のものである」という道理を熟知して正覚に達しました。

この後、教化活動を始めて間もない頃、ゴータマ・ブッダが裕福な家庭の青年たちを帰依させた記事が教典に書かれています。ここでは、常に施しの心を持ち、施しを実行すること、正しい習慣を身につけること、そうすれば死後、天に生まれるであろうという三つの訓話を説いています。これによって青年たちは出家を願ったといいます。
五人の修行者には高度のダルマを説き、一般の青年には三つの訓話を説いています。この違いは大きいです。**対機説法**といって、相手を見てゴータマ・ブッダは法を説いたといわれますが、相手によって説いたダルマが異なっています。

仏教思想は全て縁起のダルマと中道のダルマをコアとして説かれているので、これらのダルマを元に説かれていなければ、それはゴータマ・ブッダの教えでなく、仏教とはいえません。縁起のダルマは世界を認識するダルマであり、中道のダルマはブッダへ至るための実践論です。

世間は変化しながら連続する：日本では諸行無常は儚く消え去る面のみが強調されて、厭世思想ととられ、元の意味とは違って来ています。ゴータマ・ブッダは、この千変万化する場に不変で不滅のものは一つも存在しないと説きます。**霊魂や神に代表される壊れないもの、変わらないもの、消滅しないもの、始めがなく、終わりがなく存在し続けるものは何一つない**とゴータマ・ブッダは説きます。

ゴータマ・ブッダは聞かれて、神はいらないと答えました。その理由は、神があるというなら、神が一切の生類の生活に具体的にどんな役目を果たしているかと問いました。神の存在は生類の生活とかけ離れていて、生活の為になった神の働きを実証できないからです。
また、聞かれて、神があるといわず、ないともいいませんでした。何故でしょうか。神があるといえば、その存在する証拠や理由を挙げなければなりません。ないといえば、ないという証拠と理由を説明しなければなりません。だから問いに対する答えを控えたのです。神は見たことも触ったこともない相手です。どうしてあるとか、ないとか、答えられようかという訳です。
また、「私」とか「私のもの」というものはないと説きます。 我が身に霊魂が存在するという「私のもの」は何一つありません。種々の感覚や器官が集まった身体を「私のもの」と思い込んでいるものの、その「私」の実態が掴めません。実態は「私がある」というイメージを作り上げているに過ぎないと説きます(諸法無我)。

無常の世間に満ちる四苦八苦:ゴータマ・ブッダは人生は「思うよう、欲するよう、願うようにならず、避けられない」苦しみであると説きます。①生、②老、③病、④死の四苦と、⑤五取蘊苦(五感から生じる苦しみ)、⑥怨憎会苦(恨み憎む苦しみ)、⑦愛別離苦(愛し合う者が別れる苦しみ)、⑧求不得苦(求めて手に入らない苦しみ)を合わせて四苦八苦と呼びます。

縁起のダルマ:「これがある時に、かれがある。これが生起するから、かれが生起する。これがない時に、かれがない。これが滅する時に、かれが滅する」の詩偈(しげ)がそれです。これら全てのものが寄り集まり、相乗、複合、融合して生滅しているという依存関係を縁起のダルマといいます。仏典では因縁所生、因縁和合、衆縁和合などと表現しています。衆縁和合のダルマによって作られている、織りなされている世間であるから、そこは無常であり、四苦八苦に満ちており、そこには神や霊魂や私や私のものなどが見られないとゴータマ・ブッダは説きます。

八正道を実践して中道に生きよ:中道とは「最も適正で中正な行為、歩み、或いは道」の意です。人は快楽追求、或いは苦行といった両極端に生きず、中道に生きよとゴータマ・ブッダは説きます。中道のダルマは八正道の実践によって得られると説きます。

（１）**正しい見解**:衆縁和合の世間が苦しみに満ちている現実を正視して、苦しみの原因と、苦しみを超克する方法と、超克された境地を熟知すること。
（２）**正しい思惟**:煩悩を起こさず、怒らない、殺生しないように心がけること。
（３）**正しい言葉**:嘘、悪口、両舌などを口にしない、言葉を慎むこと。
（４）**正しい行い**:殺生しない、盗まない、邪淫しないなど、行いを慎むこと。
（５）**正しい生活**:怠惰な生活、歓楽に溺れた生活、邪な生活などを捨てて、道理に適った生活をすること。
（６）**正しい努力**:悪心が起きないように、生じた悪心を捨てるように、善心が起きるように、生じた善心を更に増長するように、努力すること。
（７）**正しい思い**:身体をよく観察し、正しい知識を忘れないようにし、外界の事象を観察して、正しい知識を得て忘れないようにすること。貪りや怒りを静め、正しい智慧を得るようにすること。
（８）**正しい瞑想**:平静な状態になるまで、内面に一切の感情的起伏がないように心を制御すること。

反復するから継続する。継続するとそれが身に付く。それが実力となる。実力が備わると、自在に活動できるようになる。人のためになることができる。善なるものを与えられ、伝えられる。この境地になると人に尊敬される。その境地に達した人がブッダであるとゴータマ・ブッダは説きます。

個人と個人の倫理:「六法礼経」はゴータマ・ブッダが民衆に説いた日常倫理を判りやすい表現で書いてありま

す。八正道の庶民実践版です。この経典の原典名は「シンガーラへの教え」という意味で、シンガーラというバラモン青年に対してゴータマ・ブッダが理想的な人間関係を説いているのです。
子を愛すること:①悪から遠ざけること、②善に入らせること、③技能を学習させること、④適当な妻或いは夫を迎えさせること、⑤適当な時期に財産を相続させること。
四つの愛護：①(物、教え)与えること、②親愛なる言葉を語ること、③人のために尽くすこと、④種々の事柄において協同すること。「もしもこの四つの愛護を実践しなければ、母も父も、母であり、父であるといって子から受けるべき尊敬も扶養も得られないだろう」とゴータマ・ブッダはいいました。
夫は妻に奉仕すること：①妻を尊敬すること、②妻を軽蔑しないこと、③妻以外の女性と邪淫しないこと、④家では妻に権威を与えること、⑤時々、妻に装飾品を提供すること。
妻は夫を愛すること：①家事をよく処理すること、②眷属をよく待遇すること、③夫以外の男性と邪淫しないこと、④集めた財を保護すること、⑤なすべきことを全て巧みに行い、かつ、勤勉であること。
資(弟子、学人)は師を愛すること:①座席を立って礼をすること、②近くに侍ること、③熱心に聞こうとすること、④給仕すること、⑤恭しい態度で学芸を受けること。
師は資に奉仕すること:①正しく訓育し、指導すること、②習得したことを記憶させること、③学芸の知識を全て説明してやること、④友人、同胞に学人の長所を吹聴すること、⑤学人がどこにいても庇護してやること。

個人と社会の倫理：「六法礼経」の続き
個人は同胞に奉仕すること:①施すこと、②やさしい言葉をかけること、③人のために尽くすこと、④協同すること、⑤欺かないこと。
同胞は個人を愛すること:①個人が無気力な時、守ってやること、②個人が無気力な時、その財産を守ってやること、③個人が恐れ戦いている時に、保護者となること、④個人が逆境に陥っている時でも見捨てないこと、⑤個人の子孫を尊重すること。
雇い主は従業員に奉仕すること：①その能力に応じて仕事をあてがうこと、②食物と給料を給与すること、③病気の時に看病すること、④素晴らしい珍味の食物を分かち与えること、⑤適当な時に休息させること。
従業員は雇い主を愛すること：①雇い主より先に起きること、②雇い主より後に寝付くこと、③与えられたものだけを受け取ること、④その仕事をよくこなすこと。
五戒に生きる：①殺生しない、②盗まない、③邪淫しない、④妄語しない、⑤飲酒しない。

業と来世:ゴータマ・ブッダは弟子のマールンキャプッタから「人は死後も存在するか」「死後は存在しないか」などの質問を受けました。これに対して、ゴータマ・ブッダは死後の存在を考えてみても、現世で解脱(げだつ)を得るために役に立たないとして、返答せず、捨て置きます。すると彼はしつこく回答を迫ったので、ゴータマ・ブッダは毒矢の譬えをもって答えます。(ある青年が毒矢に射られた。連れの青年が毒矢を抜いて医者に治療を頼もうとした。ところが、毒矢に射られた青年は「この矢がどこから飛んできて、どんな名前の、どんな素性の、何歳の人が射たか、矢はどんな性質の、毒の材料は何かなどの調べがつくまでは抜いてはならない。」といって抜くことを拒んだ。為に毒が身体に回って彼は死んだ。)
・・・・・死後のことをあれこれ知り尽くそうとするマールンキャプッタはこの青年と同じで、知り尽くさない内に現世で修めるべきことを疎かにし、得るべきものを手にすることなく死んでしまうだろう。しなければならないことは現世で解脱を得ることだと説きました。経験論者、行為論者であるゴータマ・ブッダの説明は現実的です。世間に定着している輪廻(りんね)を正面から否定した訳ではありません。しかし、死後のことより、現世の私自身を案じることの大事を教えているのです。

輪廻は循環的再生ではありません。何に再生するかは不明だが、何かに再生することは確かです。衆縁和合のダルマによると、輪廻を続けることもあるが、輪廻を絶つこともあるとゴータマ・ブッダは説きます。輪廻を絶

つとは解脱することです。修行によって解脱したものは輪廻しません。六道に赴かないし、六道の世界から解放されます。
ゴータマ・ブッダは行為によって世界があり、生類があると説きます。身・口・意の三つの行為を業(ごぅ、梵語：カルマン)といいます。業は蓄積されます。多くの場合、人の三つの業が物へ妄執を繰り返すと悪業を蓄積します。この悪業によって来世の転生を招きます。もし、善業を蓄積すれば、輪廻転生から解放され、解脱できるといいます。従って、悪業が輪廻の主役を演じているとゴータマ・ブッダは説きました。彼が輪廻転生を念頭において説いた言葉が「スッタニーパ」にあります。
「517 あらゆる宇宙時期と輪廻と生死二つながら思惟弁別して、塵を離れ、汚れなく、清らかで、生を滅ぼし尽くすに至った人。彼をブッダという」「740 妄執を友としている人は、この状態からかの状態へと長い間流転して、輪廻を超えることができない」「746 生存に対する妄執を絶ち、心の静まった僧は、生を繰り返す輪廻を超える。彼はもはや生存を受けることがない」

譬え話による説法：ゴータマ・ブッダは教えにあたって譬えを多用しました。八正道はゴータマ・ブッダの創案ではなく、古人の足跡であると、次のような譬えで説明しました。「修行者たち、例えばある人が人なき森林中を彷徨(さまよ)っているうちに、偶然に古人が通ったらしい古い道を発見したとしよう。その人はその道跡を辿って進んでいるうちに、古人が住んだらしい古城や園林や蓮池などのある古い都を発見したとしよう。その人は後に王や大臣たちにこのことを報告した。すると、王や大臣たちはそこに町や村を作った。やがてその町や村は栄え、多くの人が集まり、繁栄したという。このことと同じように、私は悟りを得た過去の聖者たちの辿った古い道を発見した。過去の聖者たち、つまり諸仏が辿った古い道とは、この八正道である。私はこの道に従って行くうちに、老死の苦しみを知り、老死の因って来る原因を知り、老死の苦しみの制御を知り、ブッダとなった。これを善男善女に教えたので、八正道は次第に広まり、多くの人に知られ、次々に説かれるようになった。」(相応部経典第二巻)。

出家と戒律：原始仏教教団においては、見習段階にある出家者(沙弥、沙弥尼)と、正式の出家者(比丘、比丘尼)がありました。厳格に出家といえば、仏教教国では男性で二百数十、女性で三百数十の戒律を守らなくてはなりません。ユダヤ教の律法(トーラ)が要求する五百数十の戒律と似た事情があります。
第２～３章は田上太秀著「ブッダの人生哲学」(講談社選書メチエ)から引用させていただいて纏めました。

> **ブッダ最後の旅より**・・・・ブッダは死に瀕するまさにその瞬間に、目の前にあるものが美しいと感じたという。そして浄土は「あの世」ではなく、この世の、今自らが生きている自分の心の中にあると語っている。死の間際にこそ、「一瞬の幸せ」という形で究極の生を悟ることができるということであろう。
>
> (「天命」五木寛之著／東京書籍)

偶像崇拝の禁止：ブッダは自らの死に臨んで、葬儀をしないように弟子たちに言い残しました。また、自分の姿を偶像としないように、厳重に戒めました。このため、ブッダの死後、約 500 年間は全くブッダの像は制作・礼拝されることはありませんでした。ある時点からその禁が破られ、今日の仏像全盛の時代に至ります。

４．まとめ

ゴータマ・ブッダは相手の理解力に合わせて、**対機説法**を行っています。どこまでが本音か方便か判り難いきらいがあります。「縁起のダルマ」と「八正道」は根本原理と考えてよさそうです。来世、輪廻についても発言していますが、これら二つの根本原理に対してどのように収まるのか、私は理解に苦しみます。
ゴータマ・ブッダは自ら教え書き記したのではなく、キリスト、ムハンマッド同様、弟子たちが聞いた教えの内容を書き記したものです。それぞれのお経の最初に「如是我聞」とあるのは、「私はブッダからこのように

お聞きしました」とことわっているのです。
ゴータマ・ブッダ自身の発言に対機説法がある上、その後の仏教の広域伝搬の過程で多くの修飾が行われています。日本に伝わる前の中国では、道教の神仙思想と習合してもいます。
日本に伝来してからも、多くの宗祖の思想が加わって内容が発散し、これが同じ仏教かと疑問を感じるほどの変化をしています。情報理論でいえば、非常に S/N 比(Signal Noise Ratio)が低くなっている状態です。
私はこの中から、ゴータマ・ブッダは本当は何を語ったのかを知りたかったのです。幾つかの仏教の図書に当たりましたが、上記の田上太秀氏の著書が一番、ゴータマ・ブッダの最初の教えのエッセンスに忠実であるように感じ、概説させていただきました。

疑問とその解釈（桐生の見解）：ゴータマ・ブッダは神の存在については不可知論を取ります。ならば、同じく誰も見たことがない来世について何故、詳しく語るのでしょうか。

> 古代インドの聖典「カタ・ウパニシャッド」に死に神と人間の対話が記されている。「ナチケータスが死に神に／死んだ人間に関して、次の疑問がある。「彼は存在する」とある人々はいう。「彼は存在しない」と他の人々はいう／死に神は／これについては、神々でさえ、以前に疑った。何故なら、それは容易に理解され得ないからだ。これは微細な事柄である。他の願いを選べ。私を煩わせないように。私をこれから解放せよ」。／死に神は死後の世界を熟知している神ではないかと私たちは考えるが、どうもよく判らないらしい。他の神々でさえ判っていない。何故か。神々でさえ輪廻し、次に何に生まれて変わるか不明だからだ。（「ブッダの人生哲学」田上太秀／講談社選書メチエ p165）

私の解釈は次のようです。ゴータマ・ブッダが生きた古代インドでは、人々は幼少期から多神教であるヒンドゥー教を刷り込まれ、一生にわたってその宗教環境の中で社会生活を送ります。その世界観は生を受けた者は皆、永遠に転生を繰り返すが、「来世」で何に転生するかは個人個人の「現生」の「業」によって決定されます。このような社会的な精神環境のなかで、ブッダはできるだけ多くの幅広い人々に「八正道」を実践してもらいたいのです。「八正道」が多くの人々に実践されている社会は、「社会の平和」「人々の協力関係」「人間の尊厳」「家庭生活の円満」「弱者に対する思いやり、救済」「次世代への教育・技術伝承」等の高度の徳が支配する社会でありましょう。
このため、一般の人たちを教化する場合は、ゴータマ・ブッダは「八正道」を実践して善業を積めば「来世」でよい報いがあると説きます。
正覚者に対しては、ゴータマ・ブッダは「世の中に不変で不滅のものは一つも存在しない(諸行無常)」「意識上にある『私』『私のもの』というものはない(諸法無我)」「神も来世もない」と説きます。正覚者は「縁起のダルマ」を知り尽くし、彼にとっては「来世」はなく、「輪廻」もなくなります。正覚者は人間社会をより良くするためには「八正道」が正しい道と熟知し、彼は「来世で善い階層に転生することはない」と知っても「八正道」を実践します。彼は真理を知り尽くしているのです。それでも、彼は精神的には無報酬でもより良き人間社会を実現するために「八正道」を実践する精神力があります。これが解脱です。
一般の人々は来世での報酬を期待すればこそ、「八正道」を実践して善業を積みます。彼らにとっては、「輪廻」も「来世」も実在以上のもので、「輪廻」が強力な精神的強制力となって「八正道」を実践する人々がより多くなり、社会はより良くなるでしょう。
ゴータマ・ブッダの「縁起のダルマ」を入念に分析すれば、彼は人生を炎のような現象、状態と考えており、人生を維持するために多くの「もの」が身体を通過していくのであり、輪廻しているのはその「もの」(物質)だと考えていることが透けて見えます。現代人の理解と重なる部分が多いのではありませんか。アインシュタインが「佛教は 20 世紀の科学だ。」といったのも頷けます。
「八正道」は至高の人間社会倫理であり、それをより多くの人々に普及させるために積極的に教化活動を行な

って教団を創設・発展させ、二千数百年後の今日にまで広範な地域に仏教文化圏を拡げ、人々の精神生活に巨大な影響を与えたゴータマ・ブッダは、人生哲学の強力な創始者・伝搬者でありました。

５．インドでのその後の佛教

以下はゴータマ・ブッダの宗教哲学とは関係が薄くなりますから、単なる歴史的事実として読み飛ばして行って結構です。

前３世紀、マウリア朝第３代アショーカ大王がインドの統一を果たし、「ダルマによる統治」を志し、インドは佛教王国となります。インド佛教の最盛期です。

しかし、やがてインド古来のヒンドゥー教が勢力を挽回し、地盤を浸食された佛教は生き残りのためにヒンドゥー教の神や要素や呪術を佛教の中に習合して、再興を図ります。この時期に大日如来や五仏を軸とした曼荼羅（まんだら）に示される多様な仏尊の階層化・多様化が実現しました。これが**中期密教**です。ゴータマ・ブッダが目指した宗教哲学とは既に相当乖離しています。

その後、ヒンドゥー教やイスラーム教の隆盛に対抗するため、憤怒相の護法尊（四天王（東・南・西・北に持国天、増長天、広目天、多聞天（別称：毘沙門天））、大黒天（強力な軍神）、不動尊、等）が多数登場します。これが**後期密教**です。歓喜仏が現れたのもこの時期です。

最終的に北から攻め込んできたイスラーム教政権と、南のヒンドゥー教政権の板挟みに会ってインドの密教は終焉を迎えます。

インド後期密教を最も忠実に伝承するのが現在のチベット佛教です。

６．中国への仏教の伝播

中国への伝播は**１世紀**頃（後漢時代）で、シルクロードを通して仏像や経典がもたらされました。パルティア出身の安世高が「安般守意経」「陰持入経」等の経典や禅観に関する経典を訳しています。

３世紀頃（三国・両晋・五胡十六国時代）にはサンスクリット仏典からの漢訳が行われますが、これは格義仏教と呼び、中国古来の老荘思想の用語をもって仏教を無理矢理に説明しようとしています。

５世紀（南北朝時代）になると、華厳経、法華経、涅槃経等の大乗仏教が伝播し、曇鸞により浄土教が開祖されます。東アジア特有の開祖仏教はこれが出発点です。末法思想が強くなったのもこの時代です。

６世紀（唐時代）には地論宗、攝論宗、禅宗、天台宗、三論宗、華厳宗、浄土教など宗派が乱立します。

７世紀の最も重要な高僧は、玄奘三蔵(600～664 年)です。唐の国禁を破ってインドへ仏典請来の大旅行を決行しました。彼の請来した仏典は、組織的に漢訳が進められ、後世の東アジアの仏教の基盤となりました。この冒険的大旅行がかの有名な「西遊記」の台本となっています。

８世紀には不空が密教を大成させています。

１０世紀頃には儒教・仏教・道教が融合する傾向が強くなり、インド起源の仏教がその特色を失い、中国的な宗教へと変貌して行きます。

1960 年代の文化大革命で仏教は徹底した弾圧を受け、消滅寸前まで疲弊しましたが、現在は日本や台湾の援助を受けて、沿海部では復興しつつあります。

７．日本への仏教の伝播と変化

日本では統計上は約 9,600 万人が仏教徒であり、約 75,000 の寺院にある 30 万体以上の仏像は他の佛教国に較べても、桁違いに多いのです。創価学会、真如苑などの新興宗教を除いた伝統宗教としての大手の宗派は 13 宗 56 派になるといわれます。それらを図解したものを巻末に収録しました。

信者数の多少で分類すると、現在の日本の仏教徒の大半は鎌倉仏教に属しています。中でも浄土宗系と日蓮宗系の宗派が特に多数を占めており、大乗佛教系が多いのが特徴です。

飛鳥時代の佛教（導入期）

佛教は韓国の百済を経由して大陸の先進文化として538年に日本に到来しています。普及の動機は、信仰すると当世ではみ仏の力でご利益を与えられ、死後に極楽浄土に迎えられるというものです。それぞれのみ仏には受け持ちの役割があり、例えば、薬師如来とその眷属は祈願すれば誰彼の病を癒していただける有り難いみ仏であり、現在で言えばバイオ科学医療のような存在だったのです。

日本史が述べる通り、最初に佛教が渡来した時に、それまでの日本古来の神々を信仰する物部氏と、大陸よりの新技術というべき佛教を導入しようとする蘇我氏との間で、激しい争いが起こっています。

蘇我氏が戦いを制し、佛教は国家鎮護の役割を担う宗教として、神道と並存して日本国に定着します。聖徳太子が最古の寺院・法隆寺を建立し、以後、天皇家や有力者により数多くの寺院が建立されます。

奈良時代の仏教（学問仏教）

聖武天皇が奈良(平城京)には大仏、各地に国分寺を建立(こんりゅう)、遣唐使が盛んに派遣されました。留学生により南都六宗がもたらされ、奈良には大寺院が続々建立されました。この時代の仏教は国家鎮護を目的とした学問仏教でありました。

平安時代の仏教（密教）

桓武天皇(在位781～806) は政治力を持った奈良の寺院群の掣肘(せいちゅう)から脱するために遷都し、京都に平安京を築きます。南都六宗の対抗勢力として空海と最澄を遣唐使として派遣、密教を学ばせます。

唐から帰国した伝教大師最澄(767～822年)は比叡山延暦寺で**日本天台宗**を開きます。

同じく、弘法大師空海(774～835 年)は高尾山金剛寺で**日本真言宗**を開きます。インド密教の流れを汲み、三密修行により即身成仏ができると説きました。共に都塵を離れた山岳に寺院を設け、国家から過保護になっていたこれまでの仏教の路線から「真の仏教に戻れ」との精神運動を興します。

平安時代末期は朝廷から武士階級への権力移行の不安定な時代であり、世相が騒然として社会不安が高まり、僧侶や信徒が武装して寺院を防衛する武装集団となり、他の宗派・寺院への攻撃、朝廷への強訴など、自分自身が社会不安の要素に変貌して行きました。

鎌倉時代の仏教（大衆仏教：仏教の最盛期）

（1）阿弥陀信仰・他力本願（浄土宗系）･･･法然の「浄土宗」、親鸞の「浄土真宗」、一遍の「時宗」

浄土宗：「南無阿弥陀仏」と唱えて貴賤男女区別なく西方浄土へ往生できると説きます。

浄土真宗：阿弥陀仏の願力により、信心のみで如何なるものも救われると説きます。戒律軽視、妻帯。

時宗：仏陀への「信」すら不要、「念仏」のみで極楽往生できると説きます。

（2）釈迦信仰・菩提心重視･･･ 栄西の「臨済宗」、道元の「曹洞宗」、日蓮の「日蓮宗」

臨済宗：「公案」に「参究」して「見性」しようとする「看話禅(かんなぜん)」を特徴とする禅宗です。

曽洞宗：専ら座禅する黙照禅を特徴とする禅宗です。

日蓮宗：「南無妙法蓮華経」と唱え、善行を積むことで救われると説きます。国家仏教を目指しました。

これまでの佛教が国家鎮護や貴族のものであり、学問的であったのが、次第に民衆の救済のためのものになって行きます。教義も一般民衆に理解できるように平易になり、佛教が民衆の生活の中に根付いた佛教の最盛期です。

一方、力をつけた武士階級は、当時、中国から齎された禅宗が好まれ、幕府のある鎌倉の鎌倉五山を始めとする多くの禅寺が建立されました。

室町時代の仏教

臨済宗：貴族・武士に広まります。金閣寺、銀閣寺が属する宗派です。

浄土真宗：蓮如が出て、爆発的な発展となり、やがて一向一揆の大勢力となります。

室町幕府がある京都に権力が移り、京都五山が成立し、臨済宗は幕府の保護を受けます。室町時代の文化には、佛教の影響を受けた水墨画、書院造、茶の湯、生け花、枯山水の庭園など、今日に残る多くの作品が生まれています。

戦国時代から安土・桃山時代の佛教

応仁の乱以降の治安の悪化に対抗して、宗教勢力も武力を強化します。武力の強化は必然的に武力紛争を生み、法華宗による山科本願寺焼き討ち、天台宗による天文法華の乱など、過激派宗教団体による宗教戦争も多発します。中でも加賀国一向一揆は守護大名・富樫氏を滅ぼし、80 年間に亘り支配権を行使しました。
戦国時代の多くの武将たち(織田信長、徳川家康、他)を悩ましたのがこの一向一揆の過激な軍事行動でした。
この時代、佛教は世俗政権に対抗できる一大勢力だったのです。全く同じことが中世のヨーロッパでも起こっています。
織田信長は天下布武の旗印のもと、武力で対抗してくる宗教勢力を徹底的に討伐しました。比叡山延暦寺の焼き討ち、長島一向一揆の殲滅、石山合戦などです。次の秀吉も刀狩・惣無事令によって寺院の武装解除を進め、寺社への統制を強めました。

江戸時代の仏教

徳川家康は若い時に一向宗の信徒である家臣たちの謀反に遭い、大変な苦労をして彼らと妥協して権力を確立しています。彼の旗印に入った文字が「厭離穢土、欣求浄土」であることからも、それが読み取れます。
江戸幕府は歴代の為政者たちを悩ませた寺院の軍事力を削ぐため、寺院諸法度を制定・遵守させ、キリシタン禁制を徹底するために民衆に**寺請け**(過去帖制度により民衆を寺院単位で住民登録させた)を強制しました。
当時の最大勢力であった浄土真宗の本願寺をお家騒動に付け込んで東西に分裂させ、弱体化させもしました。
東京都の上野界隈に寺院が集積しているのも、各地域の信徒と煽動者になりかねない僧侶を空間的に引き離し、軍事的に無力化するための方策でした。
かくして日本は官制仏教国となり、**国民は全員仏教徒**となりました。僧侶は信者獲得の努力が不要となり、生活を保障され、法事と葬式に明け暮れるだけの生活で、精神的に骨抜きにされます。この時代の制度が、現代の**葬式佛教**の起源となり、今に至っています。

以 上

補　遺

１．釈迦の姓名

「ゴータマ」とはパーリ語(古代インドの俗語であるが、後に仏教の聖典語(梵語)となる)で「最上の牛を持つ者」の意で、氏族の名前です。ゴータマ族はサーキャ種族の一氏族です。原始仏教の文献では「ゴータマ」と呼ぶのが普通です。「シッダッタ」(全てを成し遂げた人の意)との呼びは「釈迦」の前世物語の文献中にしか見られません。後世の人たちの仮託であろうと考えられています。結局、釈迦の俗名は判りません。

２．アラーラー仙人とウッダカ仙人に対する批判

「この教えは厭離(えんり)に向かわず、離欲に向かわず、止滅に向かわず、平安に向かわず、英知に向かわず、正覚(しょうがく)に向かわず、安らぎに向かわない。ただ無所有処(現代風にいえば、トランス状態)を得るだけである。従って私はその教えを尊重せず、その教えに満足しなかったので、去った。」
ゴータマ・ブッダは彼らの考えを捨て去った訳ではありません。ゴータマ・ブッダの説法の中では頻繁に二人のヨーガの境地が説かれています。 ただ、二人の境地は優れてはいるが、ゴータマ・ブッダの求めた正覚そのものではなかったということです。

３．中道について

ゴータマ・ブッダが活躍した時代に各種の修行者や思想家がいて、彼らを纏めて外道といいます。その中で、仏教文献にしばしば登場する有名な６人がいます。六師外道といいます。
六人の中に「死後の存在」があるかないかを論じた思想家がいました。

その一人は**アジタ・ケーサカンバリン**です。彼は身体は地・水・火・風から構成され、死んだ後はそれらは自然界の自分の族の集合に帰るので、何も残らないと説きます。従って死後「私のもの」と思っているものが来世に再生することはないといいます。それならば、現世で思い切り楽しめという快楽主義を唱えています。この考え方を仏教では「断見」と呼びます。

ブーラナ・カッパサは因果応報説を否定しました。彼の考えには来世も前世もなく、行為の因果関係の全てを否定しました。彼の説を「非業説」と呼びます。この二人の説の根底は不滅の霊魂を否定しています。

パクダ・カッチャーヤナは現世から来世へと生類の個体は連続して存在すると唱えました。彼は地・水・火・風・苦・楽・霊魂の七要素説を採ります。苦と楽が来世にも付随するので、来世で報いを受けるといいます。これを「常見」といいます。七つの要素は恒常で常住であるという考えです。

マッカリ・ゴーサーラはもう一人の連続説です。彼は生類の苦しみも何度か転生を繰り返す内に段々消化されて宿命的に与えられた分量の苦しみがなくなる時が来る、その時に人は苦しみから完全に解脱できると説きました。苦しみを避けるのではなく、積極的に苦しみを受け入れるべきだと説いたようです。

ゴータマ・ブッダは快楽も苦行も全く極端であるから、そこから離れるべきだと説きます。その教えは当時の宗教の極端説を非難する目的で説かれています。ゴータマ・ブッダは、その行いや考えに偏りがなく、適正で公正であるようにと修行者に認識させるために中道を説きました。

４．譬え話の効用

ゴータマ・ブッダは説法の中で多くの譬えを話しています。ある概念を相手に理解させるために、既にその人が理解できている既存の概念のアナロジーとして説明して、相手の理解を助ける方策です。

この点はキリスト教のイエスと共通点があります。「弟子たちはイエスに近寄って、『なぜ、あの人たちには譬えを用いてお話しになるのですか』といった。イエスはお答えになった。『あなた方は天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。だから、彼らには譬えを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。・・・・・』」。この節(マタイによる福音書 13 章 10～14 節)は貧富の二極分化の説明する用語として、経済学で「**マタイ効果**」と呼ばれています。

５．偶像礼拝の禁止

ゴータマ・ブッダが自分の偶像の制作・礼拝を堅く禁じ、その禁忌は約 500 年の間は守られました。
ユダヤ教でも、モーセがシナイ山で神から与えられた十戒の第一条が偶像礼拝の禁止でした。ユダヤ教では現在もその教えを堅く守っています。
ユダヤ教のアラビヤ版であるイスラーム教も偶像礼拝の禁を堅く守っています。アッラーを偶像としないのみか、図書の中で教祖ムハンマッドの絵を描く場合でも、他の人たちはそのまま描くが、ムハンマッドの身体衣服は普通に描くが、顔はその部分を卵形の輪郭を持つ空白として描きます。厳格に教祖の教えを 14 世紀間に亘って守っているのは立派です。

教義の純粋性の維持という面からは、偶像礼拝が禁じられることは理解できます。しかし、仏教美術の粋である仏像が制作されなかったとしたら、仏教は寂しい宗教に止まり、信者数も限られたのではないでしょうか。
キリスト教が大きく伸びた理由の一つとして、判り易い聖像の存在も大きかったと思います。所詮(しょせん)、人間は抽象的な存在の操作よりも具体的な存在の操作に慣れており、安心感を覚え、感情移入が可能になる、ということなのでしょう。
仏像の来歴を知れば、佛教の世界観が別の宗教を習合しながら成長してきた経緯が理解できます。棍棒を持った金剛力士はギリシャのヘラクレス、八部衆のひとり乾闥婆(けんだっぱ)はケンタウルスに由来します。
金比羅(こんぴら)さんは水の神であるインド神話のクンピーラ、梵天(ぼんてん)はバラモン教の最高神ブラーフマ、阿修羅の起源は古代メソポタミアの光明神アフラマツダーです。asu-ra は命を与える者の意です。
この宗教はアフラマツダーから派生した火の神ミトラと、水の神ヴァルナを持ち、ミトラ神はその後ユーラシア全域に広がっています。ミトラ神はインド神話でマイトレーヤに、佛教では弥勒になっています。

(2010/7/20 日本経済新聞:「私の中の仏像たち」／彫刻家 藪内佐斗司)

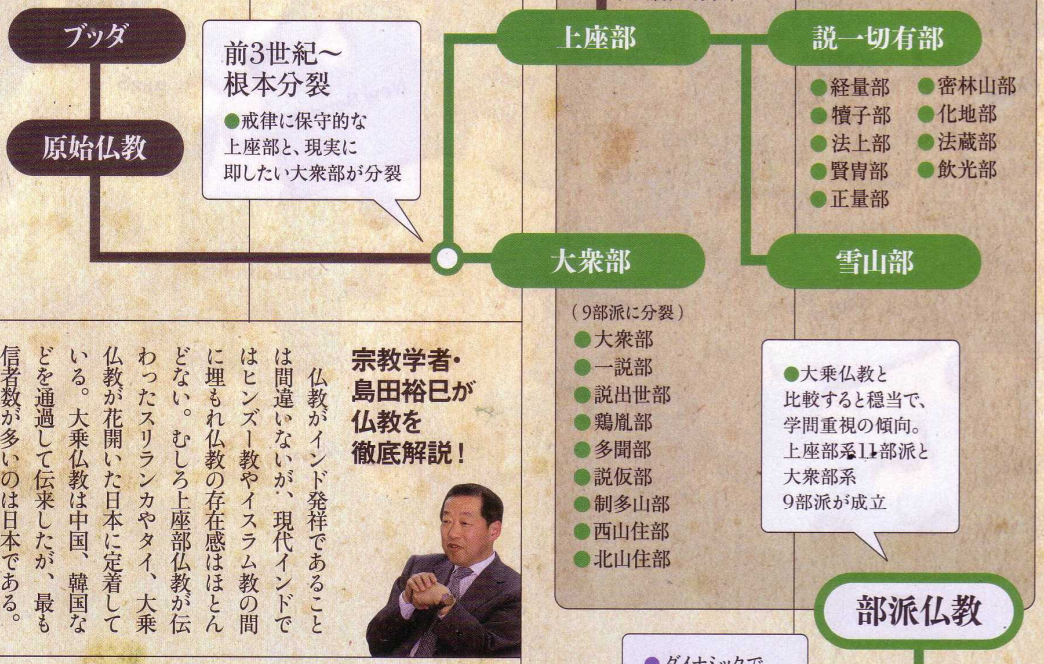
６．対機説法の妙

ゴータマ・ブッダは高度の修行者に対しては「私」や「私のもの」は無いと説き(最後の頁にある「般若心経」参照)、「この世」を「縁のダルマ」で理解し、「八正道」で生き抜く努力を優先すれば「来世」を論ずる時間は無いはずだ、との姿勢を取ります。
「**この世こそ浄土なのだ**」というのが根本的な認識です。この認識はプラトンなどのギリシャ哲学者の思想に通ずるものがあります。
一方で、「縁のダルマ」を突き詰めて理解できない一般市民に対しては、輪廻転生に導く「悪業」を積むことを避け、「善業」を積めば天に迎え入れられるとも説いています。「八正道」を正しく実践することが「悪業」を避け、「善業」を積む縁となるというのです。
何れの説法でも、「八正道」を積極的に実践させようとする意図は共通しています。このような巾広い対象を相手に教団を創設・運営して論理的破綻を来さず、多くの人たちの尊敬を集め、仏教に帰依させた手腕は見事なものです。**「八正道」とは社会を営む人間としての人間倫理そのもの**ではないでしょうか。
それ故、田上太秀氏は著書に「ブッダの人生哲学」との題名を付けておられるのだろうと思います。

仏教編

古代インドで生まれ、中国、朝鮮半島を経て
日本に伝わった仏教。
その広がりと変遷の歴史を振り返る。

▼「2大宗教の思想の系譜」早わかり図解！



宗教学者・島田裕巳が仏教を徹底解説！

仏教がインド発祥であることは間違いないが、現代インドではヒンズー教やイスラム教の間に埋もれ仏教の存在感はほとんどない。むしろ上座部仏教が伝わったスリランカやタイ、大乗仏教が花開いた日本に定着している。大乗仏教は中国、韓国などを通過して伝来したが、最も信者数が多いのは日本である。

仏教はキリスト教やイスラム教と比べ教義が穏健で、その意味で宗教というより思想に近い。ブッダ以来の原始仏教は生き方の範を示すような内容が多かった。学問重視の部派仏教に対する反発から生まれた大乗仏教に至り、「空」の思想など宗教らしい体裁を整えたといっていい。

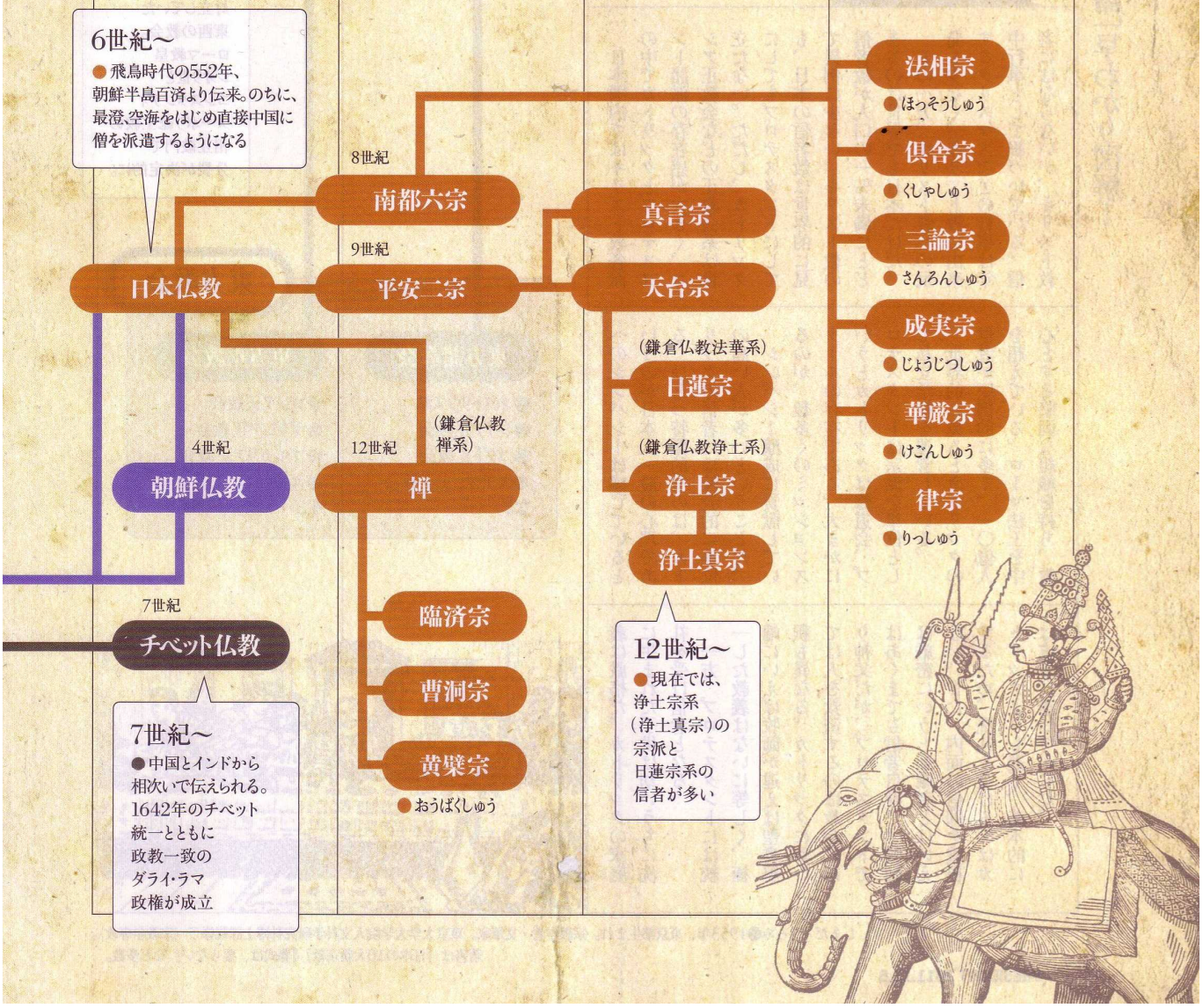
日本の仏教は飛鳥時代に伝来して以来、各宗派に分かれ発展してきた。だが、歴史的に見れば宗派間の垣根はさほどはっきりしたものではなく、平安時代の僧は南都六宗と平安二宗を合わせた「八宗兼学」が基本とされた。宗派の形が整ったのは、江戸時代に本山・末寺関係が成立してからだ。現代でも、たとえば葬式のやり方は日蓮宗・浄土真宗以外ほぼ同一である。

江戸時代の寺院諸法度で統制がなされるまで日本の仏教勢力はきわめて強く、戦国大名などの世俗権力をしのぐほどだった。たとえば奈良・興福寺は現在の奈良県全域を寺領としていた。これは中世ヨーロッパで教会勢力が権勢を振るっていたことと共通している。 P

面澤淳市＝構成　小倉和徳＝撮影

▼各宗派の概要

	教祖	代表的な寺院	教えの特徴
浄土真宗	親鸞	東本願寺、西本願寺（ともに京都）	絶対他力の思想を特徴とする。自力を否定し、「本願他力」を説く。本願寺派や大谷派をはじめ10派に分かれている
浄土宗	法然	知恩院（京都）、増上寺（東京）	阿弥陀仏を一心に信心し、「南無阿弥陀仏」を唱えれば誰でも極楽浄土に行ける
真言宗	空海	金剛峯寺（和歌山）、東寺（京都）	人間が現世においてそのまま仏になれるとする「即身成仏」を説く。修行の目的は大日如来と一体化すること
日蓮宗	日蓮	久遠寺（山梨）、池上本門寺（東京）	「南無妙法蓮華経」を唱えると、その場から理想の社会が生まれてくるとする。来世だけでなく、現世の利益を約束する
天台宗	最澄	延暦寺（滋賀）、寛永寺（東京）	法華経の教えのもと、禅・念仏・密教などすべての教えを統一する総合仏教。「誰でも仏になれる」という悉有仏性を基本とする
曹洞宗	道元	永平寺（福井）、総持寺（神奈川）	ひたすら坐禅を組むことで悟りに至ろうとする「只管打坐」を行う。坐禅がそのまま悟りになると説く
臨済宗	栄西	建仁寺（京都）、建長寺（神奈川）	私たちに本来備わる仏性を、坐禅・公案・作務などの修行を通して自覚することを目的とする。禅問答を行うことで悟りに近づく
法相宗	道昭	興福寺、薬師寺（ともに奈良）	すべての事象は原因と結果で成り立つ。心の世界以外は何もないと考える唯識思想に基づく
黄檗宗	隠元	萬福寺（京都）、崇福寺（長崎）	日本の宗派の中でもっとも遅くに開かれた。禅の修行をしながらも、浄土門の教えにも仏の道を見出し、融合を図る



仏説摩訶般若波羅蜜多心経

観自在菩薩　行深般若波羅蜜多時　照見五蘊皆空
度一切苦厄　舎利子　色不異空　空不異色　色即是空
空即是色　受想行識　亦復如是　舎利子　是諸法空相
不生不滅　不垢不浄　不増不減　是故空中無色
無受想行識　無眼耳鼻舌身意　無色声香味触法
無眼界　乃至無意識界　無無明　亦無無明尽
乃至無老死　亦無老死尽　無苦集滅道　無智亦無得
以無所得故　菩提薩埵　依般若波羅蜜多故
心無罣礙　無罣礙故　無有恐怖　遠離一切顛倒夢想
究竟涅槃　三世諸仏　依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提　故知般若波羅蜜多
是大神呪　是大明呪　是無上呪　是無等等呪
能除一切苦　真実不虚　故説般若波羅蜜多呪
即説呪日　羯諦　羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦
菩提薩婆訶　般若心経

イヤな自分を変える「二六二文字の世界」

島田裕巳
一九五三年、東京都生まれ。宗教学者。文筆家。東京大学大学院博士課程修了。『般若心経262文字のことばの力』など著書多数。

求道者である観音菩薩は、深遠な知恵の完成をめざして、その実践をしていたとき、すべての存在を構成している五つの要素がみな実体のないものとしてあることを認識し、いっさいの苦悩やわざわいを超越することができた。

我が弟子であるシャーリプトラよ、物質的現象は実体のないものにことならず、実体のないものは物質的現象にことならない。物質的現象はまさに実体のないものであり、実体のないものはまさに物質的現象である。そして、物質的現象とともに、すべての存在を構成している他の四つの要素である人間の感覚も、イメージも、こころの働きも、さらには知識も、物質的現象の場合とまったく同じなのである。

シャーリプトラよ、いっさいの存在するものは実体のないことを特徴としており、生じることもなく、滅することもなく、汚れることもなく、清まることもなく、増えることもなく、減ることもない。このために、実体のない状態においては、物質的現象もなく、感覚もなく、イメージもなく、こころの働きもなく、知識もない。また、目や耳や鼻や舌やからだや思いといったものもなく、それが対象とする形も音も香りも味も、触ったり、思ったりすることのできる対象もない。さらに、目で見える世界も、意識の世界もない。そして、迷いもなく、迷いが尽きることもない。また、老いることも死ぬこともなく、老いることや死ぬことが尽きることもない。苦しみも、苦しみの原因も、苦しみを滅することも、苦しみを滅するための方法もない。

知恵もなく、体得すべきものもない。体得すべきものがないので、求道者は、知恵の完成によって、こころに障害がなくなる。こころに障害がないから、恐れもなく、正しく見ることを妨げる迷いを離れて、永遠の平和を極めるのだ。現在、過去、未来にわたる三世の仏たちは、知恵を完成することによって、このうえない完全な悟りを体得している。

それゆえに、以下のことを理解すべきである。知恵の完成は真言（マントラ）であり、偉大な悟りの真言であり、このうえないすばらしい真言であり、他に比べることのできない真言である。いっさいの苦しみを取り除く、真実なるものであり、虚しいものではない。知恵の完成は、真言を説く。その真言とは「羯諦　羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦　菩提薩婆訶」である。

これこそが、完璧な悟りに至るための真髄である。

補遺了